

## おたまじゃくしぞうきんプロジェクト 3

—京都教育大学附属桃山小学校における被服製作実習の成果と課題—

井上えり子<sup>1)</sup>・榊原 典子<sup>1)</sup>・藤田 加代<sup>2)</sup>  
沼田ひろみ<sup>2)</sup>・岡本 芳子<sup>2)</sup>

Tadpole Dustcloth Project 3:  
Results and Problems of Practice at the Momoyama Elementary School  
Attached to Kyoto University of Education

Eriko INOUE, Noriko SAKAKIBARA, Kayo FUJITA,  
Hiromi NUMATA and Yoshiko OKAMOTO

抄 録：2007年11月と2008年6月に、本学附属桃山小学校の家庭科において、おたまじゃくしぞうきん(OZ)キットを使用した被服製作実習を実施した。作品完成後、2007年12月に6年生(有効回答数75票、回収率100%)、2008年9月に5年生(有効回答数72票、回収率100%)にアンケート調査を実施した。その結果、全体の8割の児童がOZの製作実習について楽しいと感じ、7割を超える児童が熱心に取り組んだと回答するなど、OZが被服製作への意欲を高める教材であることが確認された。

キーワード：学校清掃，家庭科，被服製作，雑巾，環境教育

### I. はじめに

第2報では、本学附属桃山小学校(以下、桃小と略記)におけるおたまじゃくしぞうきん(以下、OZと略記)の活用実践について報告した。第3報では、2007年11月と2008年6月に実施した家庭科におけるOZの製作実践について、その成果と課題について述べる。

### II. OZ1号の製作実践(2007年10～12月)

#### 2.1 OZ1号の製作アンケート調査の対象と方法

2007年11月に6年生80人を対象として、家庭科でOZの製作キット1号(写真1・2)を使用した被服実習(全5時間、岡本芳子教諭指導)を行った。作品完成後の2007年12月17

---

1) 京都教育大学家政科 2) 附属桃山小学校

日に、OZの製作に関するアンケート調査を実施した。調査対象者は調査当日の欠席者を除く75人（有効回答75票）で回収率は100%である。

調査項目は、①楽しかったか、②その理由、③製作態度、④その理由、⑤作り方の難易度、⑥難しかった箇所、⑦製作時間、⑧活用方法、⑨デザインをどう思うか、⑩改善したらよいと思う点の10項目であり、最後に感想欄を設けた。

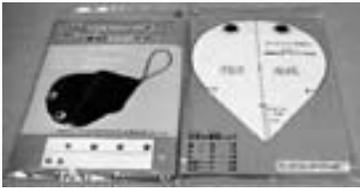


写真1

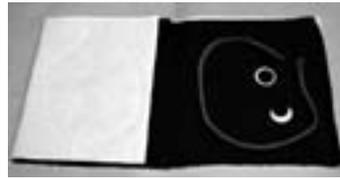


写真2

## 2.2 結果

### 2.2.1 楽しかったかどうかとその理由

図1はOZの製作が楽しかったかどうかを尋ねたものである。「とても楽しかった」と答えた児童は20%、「楽しかった」57%、「あまり楽しくなかった」19%、「楽しくなかった」3%である。全体の77%の児童が楽しんでOZの製作に取り組んでいたことがわかる。性別からみると、「とても楽しかった」割合は男子が29%で女子の11%を大きく上回っている。

楽しかった理由としては、「縫うことが好きだから」が18人と最も多く、次いで「難しかったから」17人、「完成してうれしい」7人、「作ったものをすぐ使えるから」「作ったものを人にあげるから」など活用できるが4人などである。6年の児童はこれまでエプロン（ミシン縫い）とナップザック（手縫い）を製作しており、裁縫を好む児童が多く、さらに、難しいものにチャレンジし出来上がった達成感を得て楽しいと感じたようである。

これに対して、楽しくなかった理由は、「難しかったから」7人、「あまり使わないものを作っているから」3人、「手芸が得意でないから」1人などである。裁縫に対して苦手意識のある児童にとっては難しさが苦痛になる場合も少なくない。被服製作実習では個人差に対する対応は大きな課題であり、この点については、今後、製作方法を一部簡略化するとともに、意欲のある児童にはさらにチャレンジできるような箇所をつくるよう改良することが必要である。

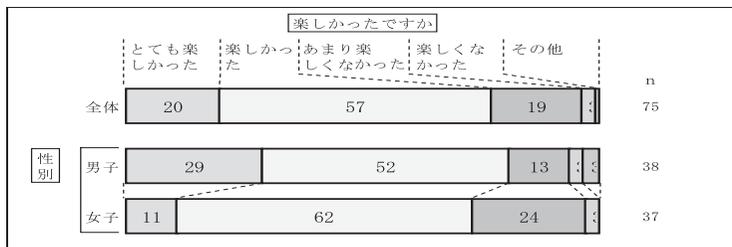


図1

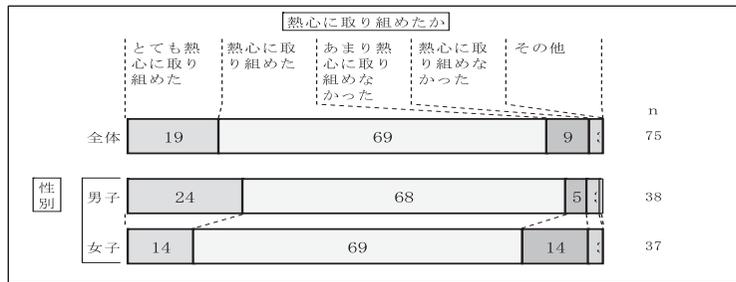


図 2

### 2.2.2 製作態度とその理由

図 2 は製作態度を尋ねたものである。「とても熱心に取り組めた」と答えた児童は 19%、「熱心に取り組めた」69%、「あまり熱心に取り組めなかった」9%、「熱心に取り組めなかった」3%である。ほとんどの児童が熱心に取り組んでおり、本教材は児童にとって適切であったといえるだろう。性別でみると、「とても熱心に取り組めた」割合は男子が女子よりも 10 ポイント高く、男子が熱心に取り組んだ様子が窺える。

熱心に取り組めた理由としては、「楽しかったから」「おもしろかったから」が 26 人と最も多く、次いで「きれいに作ろうとおもったから」11 人、「早く完成させたかったから」9 人、「裁縫が好きだから」3 人などである。また、「縫うところがいっぱいあって集中できた」など集中して取り組めたと記述している児童が 6 人であった。

一方、「熱心に取り組めなかった」児童の理由は、「友達としゃべっていたから」4 人、「使わないものを作っているから」1 人、「おもしろくないから」1 人、「なまけていたから」1 人などである。これらの記述から、活用目的を明確にするなど、意欲の低い児童に対する働きかけについて工夫する必要があるといえる。

### 2.2.3 作り方の難易度と難しい箇所、製作時間

図 3 は作り方の難易度を尋ねたものである。「難しかった」と答えた児童は 16%、「少し難しかった」36%、「ふつう」37%、「少し簡単だった」7%、「簡単だった」4%である。半数の児童が難しいと感じているが、すでにみたように児童は難しいことをやり遂げたときに達成感を感じるため難易度としては妥当であるといえよう。性別からみると、男子の方が女子よりも難しいと感じており、「難しかった」は男子 21%対して女子は 11%と半数である。この結果からみると、やや難しい（全体の 2 割程度が難しいと感じ、少し難しいと合わせて半数を超える

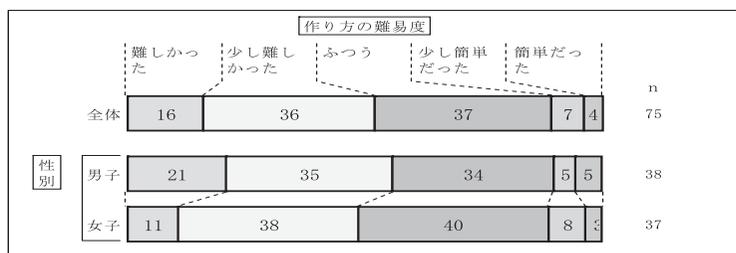


図 3

程度) 方が児童は熱心楽しく製作に取り組むと考えられる。

難しい箇所としては、「ひものつけ方」45%、「ひっくり返して白布と黒布を合わせて縫うところ」45%、「布の折り方」45%、「目のつけ方」43%、「印つけ」29%などである。このうち、目については取り付けやすいように接着剤付きのフェルトを使用したがるが、針に接着剤が付着してしまい、かえって縫合に手間どることになった。この点は今後の改善点である。

製作時間(45分単位時間)は、最も早い児童は3時間(10人)、遅い児童は12時間(1人)であり、平均は4.5時間で4名を除き授業時間(5時間)内に完成している。小学校の被服教材としてはほぼ妥当な製作時間であるといえよう。

#### 2.2.4 活用方法

図4は活用方法を示したものである。「学校で使う」と答えた児童は37%、「家で使う」56%、「誰かにプレゼントする」16%、「その他」5%である。その他に含まれるのは「まだ決めていない」児童と「わからない」児童である。全体では学校よりも家で使う割合がやや多いが、性別でみると男子は「学校で使う」が47%と多く、女子は「誰かにプレゼントする」が26%と多い。ほとんどの児童がOZを何等かの形で活用しているといえる。

#### 2.2.5 デザイン

図5はOZのデザインについて尋ねたものである。最も多いのは61%の「手が入るのがよい」であり、次いで「かわいい」48%、「ひもがついているのがよい」47%、「黒い色がよい」40%、「大きさがよい」35%である。ここでもOZは機能性とデザイン性から好まれているといえよう。これに対して、OZに否定的な意見は「かわいくない」11%、「色が悪い」5%、「使

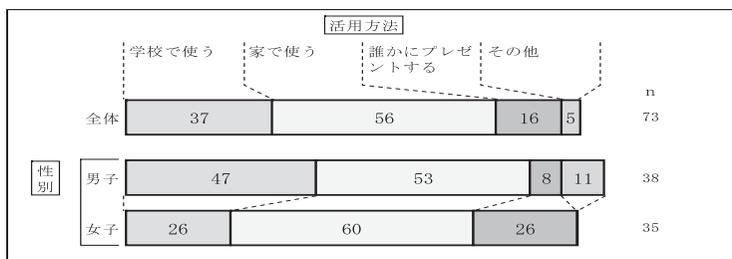


図 4

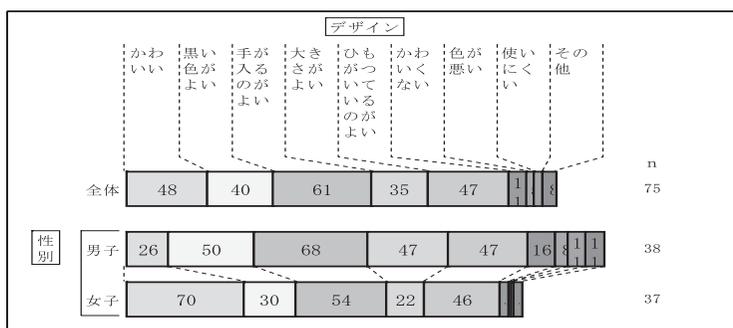


図 5

にくい」7%である。

性別でみると、「かわいい」は男子26%に対し女子70%で圧倒的に女子である。これに対し男子は「黒い色がよい」(50%)や「大きさがよい」(47%)が女子(同30%, 22%)を大きく上回る。また、OZについて否定的な意見は男子に多い。OZのデザインについては性別によって感じ方が大きく異なるといえよう。

### 2.2.6 改善点

先述したように、接着剤付きのフェルトを目に使用したため針に接着剤が付着してしまい、かえって縫合に手間どることになった。児童からこの点を改善して欲しいという意見が多く寄せられたので、今後改善したい。OZのサイズについて、手の大きい児童からもう少し大きくして欲しいという意見や小さな児童からは小さくして欲しいという意見が出された。サイズについては児童の手の大きさに合わせて調節するよう指導することも必要である。

また、「洗いやすい形にして欲しい」、「下雑巾用のものも作って欲しい」、「一度使ったら汚れてしまうと思うとついつい使えないところ」などの意見が記述されていた。先述のように、「もったいなくて使えない」という点については雑巾として使えるようなデザインに改良する必要があるといえる。

### 2.2.7 感想

児童の記述は、「裁縫がもっと好きになった」、「作り終わった時にうれしさを感じた」、「アイデアがよい」、「学校や家をきれいにしようと思った」、「環境によい」など肯定的な意見が多数を占めた。子どもたちがOZの製作実習を通じて、ものづくりに関する知識や技能を習得するとともに、ものづくり自体の楽しさを感じ、出来上がった作品を活用しようとしていることが感想から読み取れ、本実践の効果がこれらの記述から確認された。

## Ⅲ. OZ2号の製作実践(2008年6～9月)

### 3.1 OZ2号の製作アンケート調査の対象と方法

2008年6月には、5年生80人を対象として、家庭科で改良したOZキット2号(写真3)を使用した被服実習(6時間、沼田ひろみ教諭指導、一部教育実習生指導)を行った。OZ2号は5年生の裁縫の導入教材として製作したものである。先に実施した2つのアンケート調査からOZ1号のデザインは使用頻度が低いため、22cm×16cmの綿の黒タオル地(2枚)と白布(1枚)を重ねて縫製し紐を付けた。白面に印刷された図に従って、5mm、3mmの並縫い、5mmの半返し縫い、5mmの本返し縫いをするようになっている。中央にはおたまじゃくし型が描かれている。

作品完成後の2008年9月上旬に、OZ2号の製作アンケート調査を実施した。調査対象者は調査当日の欠席者を除く72人(有効回答72票)で回収率は100%である。

調査項目は、①楽しかったか、②その理由、③熱心に取り組めたか、④その理由、⑤作り方の難易度、⑥難しかった箇所、⑦製作時



写真3

間, ⑧活用方法, ⑨デザインをどう思うか, ⑩改善したらよいと思う点の 10 項目であり, 最後に感想欄を設けた。

## 3.2 結果

### 3.2.1 楽しかったかどうかとその理由

図 6 は OZ の製作が楽しかったかどうかを尋ねたものである。「とても楽しかった」と答えた児童は 41%, 「楽しかった」39%, 「あまり楽しくなかった」15%, 「楽しくなかった」4%, 「その他」1% である。全体の 80% の児童が楽しんで OZ の製作に取り組んでいたことがわかる。

これは OZ1 号より高い値である。性別からみると, OZ1 号とは逆に「とても楽しかった」割合は女子が 45% で男子の 35% を 10 ポイント上回っており, 女子に人気があったといえる。

楽しかった理由としては, 「はじめて縫えたから」が 16 人と最も多く, 次いで「裁縫が好き」11 人, 「難しいから」8 人, 「きれいに縫えたから」5 人, 「かわいいから」2 人などである。5 年の児童にとって OZ2 号は, 練習用布で基礎縫いの練習後, 最初に取り組む作品であり, 新しい知識や技能を習得して作品を完成させる楽しさを十分に感じたようである。

これに対して, 楽しくなかった理由は, 「難しかったから」9 人, 「失敗した」1 人, 「休んでいて皆に追いつかなかった」1 人などである。先述したように, 被服製作実習では個人差に対する対応は大きな課題であり, この点については, 製作方法を一部簡略化することや意欲のある児童はさらにチャレンジできるようなデザインに改良することで対応していきたい。

### 3.2.2 製作態度とその理由

図 7 は製作態度を尋ねたものである。「とても熱心に取り組めた」と答えた児童は 37%, 「熱心に取り組めた」38%, 「あまり熱心に取り組めなかった」21%, 「熱心に取り組めなかった」0%,

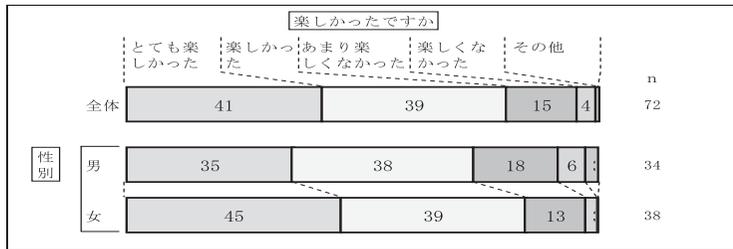


図 6

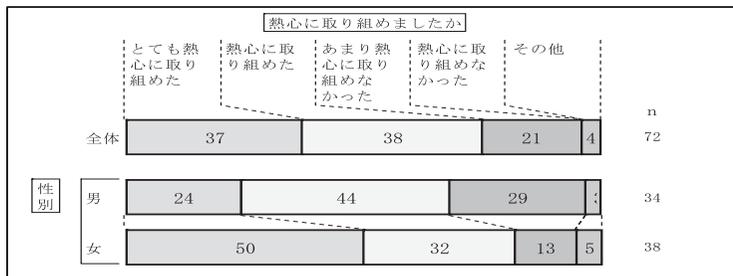


図 7

「その他」4%である。75%の児童が熱心に取り組んでおり、本教材は児童にとって適切であったといえるだろう。性別でみると、「とても熱心に取り組めた」割合は男子25%に対し、女子は50%であり、女子が熱心に取り組んだ様子が窺える。

熱心に取り組めた理由としては、「楽しかったから」「おもしろかったから」が10人と最も多く、次いで「頑張ろうとおもったから」9人、「きれいに作りたかったから」5人、「早く完成させたかったから」3人、「裁縫が好きだから」2人などである。一方、「熱心に取り組めなかった」児童の理由は、「難しいから」1人、「時間がかかったから」1人、「友達としゃべっていたから」2人、「おもしろくないから」1人、「なまけていたから」1人などである。これらの記述から、遅れている児童への支援を工夫するとともに、活用目的を明確にするなどして意欲の低い児童に働きかけることが重要であるといえる。

### 3.2.3 作り方の難易度と難しい箇所、製作時間

図8は作り方の難易度を尋ねたものである。「難しかった」と答えた児童は26%、「少し難しかった」22%、「ふつう」35%、「少し簡単だった」6%、「簡単だった」11%である。半数の児童が難しいと感じているが、すでにみたように児童は難しいことをやり遂げたときに達成感を感じるため難易度としては妥当であるといえよう。性別からみると、男子の方が女子よりも難しいと感じており、「難しかった」は男子32%に対し女子は21%である。先のOZ1号の結果と比較し、男子にとっては難易度が高かった可能性がある。やはり、やや難しい程度（全体の2割程度が難しいと感じ、少し難しいと合わせて半数を超える程度）の難易度である場合、児童は熱心に楽しく製作に取り組むと考えられる。

難しい箇所としては、「本返し縫い」71%、「半返し縫い」56%、「玉どめ」49%、「3mmのなみ縫い」34%、「玉結び」32%、「針に糸を通すこと」29%、「おたまじゃくし形のなみ縫い」24%、「5mmのなみ縫い」14%などである。

製作時間（45分単位時間）は、最も早い児童は3時間（7人）、遅い児童は11時間（1人）であり、平均は4.5時間で6名を除き授業時間（6時間）内に完成している。小学校の被服教材としてはほぼ妥当な製作時間であるといえよう。

### 3.2.4 活用方法

図9は活用方法を示したものである。「学校で使う」と答えた児童は36%、「家で使う」59%、「誰かにプレゼントする」4%、「その他」7%である。その他に含まれるのは「まだ決め

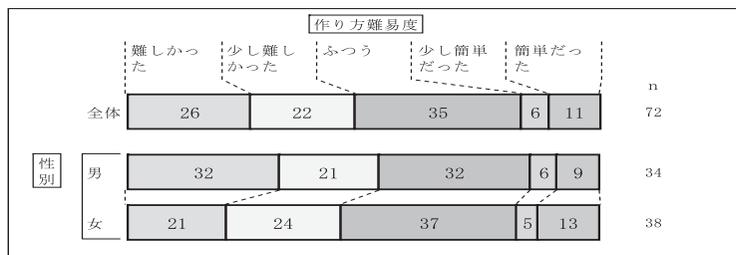


図 8

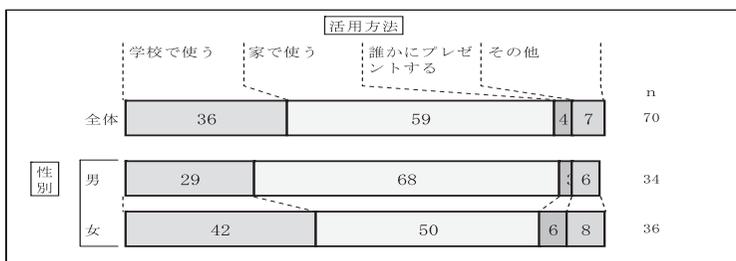


図 9

ていない」児童と「わからない」児童である。全体では学校よりも家で使う割合が多いが、性別でみると OZ1 号とは逆に男子は「家で使う」が 68% と多く、女子は「学校で使う」が 42% と多い。ほとんどの児童が OZ を何等かの形で活用しているといえる。

### 3.2.5 デザイン

図 10 は OZ のデザインについて尋ねたものである。最も多いのは「ひもがついているのがよい」43%、次いで「かわいい」42%、「黒い色がよい」36%、「大きさがよい」33%である。ここでも OZ は機能性とデザイン性から好まれているといえよう。これに対して、OZ に否定的な意見は「かわいくない」26%、「色が悪い」21%、「使いにくい」7%である。

性別でみると、OZ1 号と同様、「かわいい」は男子 26% に対し女子 55% で圧倒的に女子である。これに対して男子は「黒い色がよい」(41%) や「大きさがよい」(41%) が女子 (同 32%, 26%) を上回っている。また、OZ について否定的な意見は男子に多い。OZ1 号、2 号の結果から、OZ のデザインについては性別によって感じ方が大きく異なるといえよう。

### 3.2.6 改善点

OZ2 号は縫い取りが容易なように図柄を印刷したが、児童からは「自由に絵を描いて作れるようにしてほしい」という意見が出された。この点については、直線のみ印刷し他は自由に描くか、総て自由に描くように改良する方向で検討したい。

また、「もう少しかわいくしてほしい」という意見が多く出されたが、これは児童が前年度に OZ1 号を使用しているため、OZ1 号と比較して 2 号はかわいくないと感じるためであろう。先述したように、OZ2 号は使用頻度を上げるために改良したデザインであるが、児童に対して、この点に関する説明が十分でなかった点は課題である。

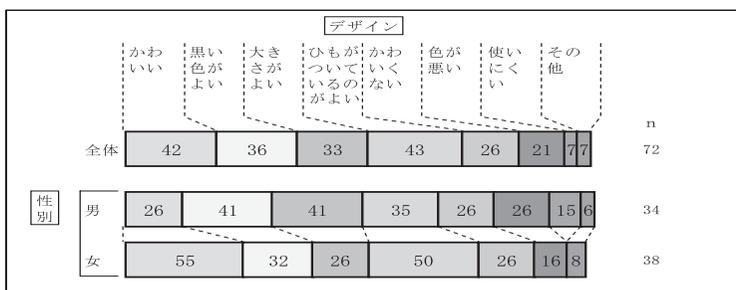


図 10

### 3.2.7 感想

児童の記述は、「すごく疲れたがおもしろかった」、「完成したときはヤッターと思った」、「大変だったけど楽しかったのでまた作りたい」、「このぞうきんで床・窓などをふきたい」など肯定的な意見が多数を占めた。自分が作ったOZ2号と前年度大学生から贈られたOZを比較して、「大学生が作ったものはもっと大変だと思いました」と贈られたOZを作るために費やされた労力について考えた児童もいた。

また、OZ1号の場合にみられた「もったいなくて使えない」という記述はなく、活用しようとしていることが窺えた。このように、子どもたちがOZの製作実習を通じて、ものづくりの楽しさを感じ、被服製作に対する関心や意欲が向上するとともに、作品を活用しようとする意欲も高まっていることが読み取れ、本実践の効果が確認された。

## IV. おわりに

前報と合わせた桃小での3つの実践の結果から、OZが児童の清掃活動への意欲と被服製作への意欲を高める点が確認された。

とりわけ、OZ1号は1～3年生までの児童に効果的であり、中学校や高校と連携して、生徒がOZ1号を製作し、低学年児童にプレゼントする活動を取り入れることで、児童の清掃活動への意欲を高めるとともに、中学生高校生と小学生の交流を図ることも可能である。

また、OZ1号、2号の製作では、全体の約8割が楽しく取り組み、7割を超える児童が熱心に取り組んだと答えている。このことから、本教材は小学校の被服教材としては適切であるといえよう。いくつか、改善すべき点は認められるが、今後、これらの点についてはさらに検討していきたい。

本研究は文部科学省平成17年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）選定 京都教育大学「知的財産創造・活用力を育成する教員の養成」プログラムによるものである。